

人と自然と文化にやさしい地域づくり

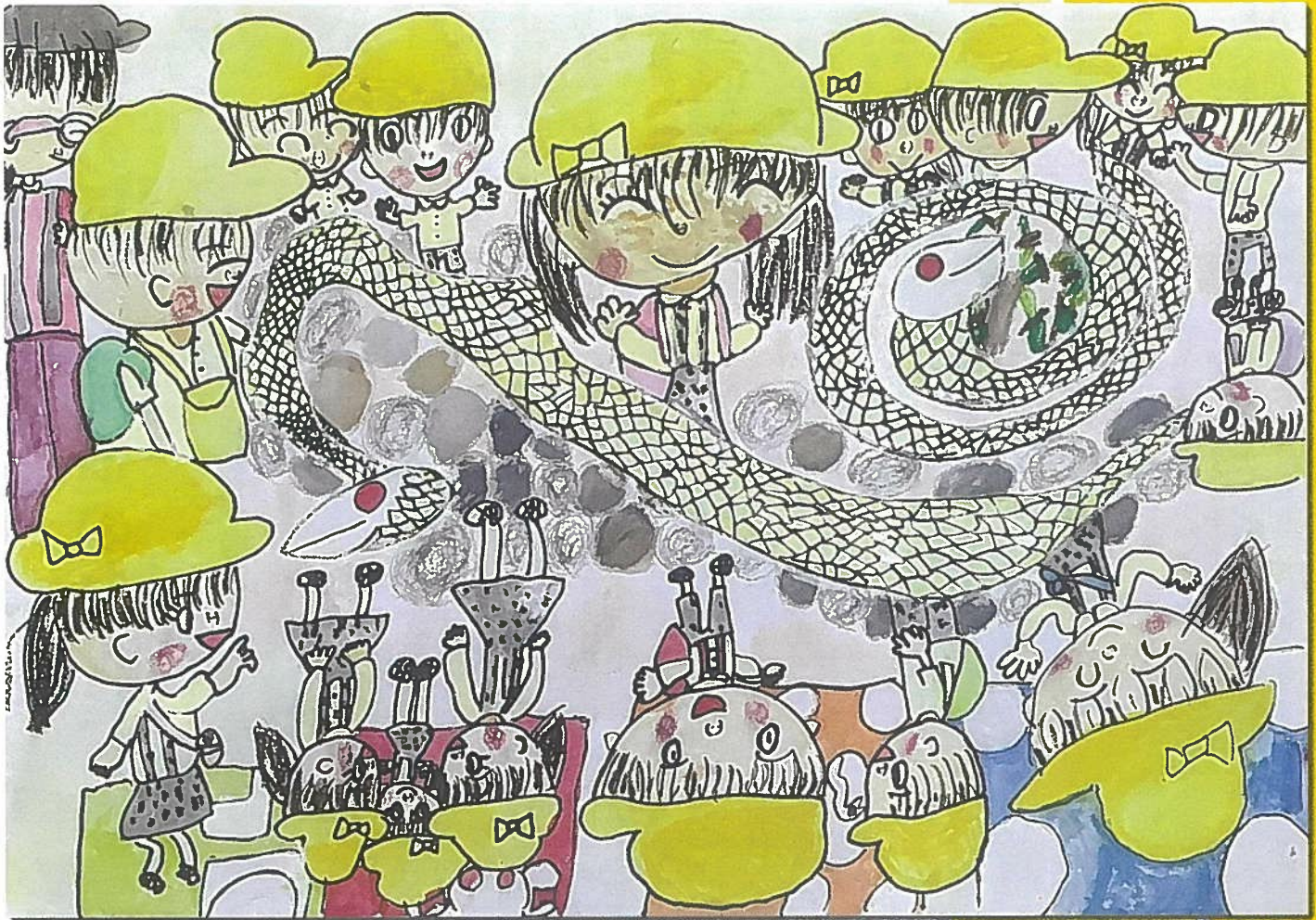
山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

人間性豊かに生きる — 「人間性」を求める —

2

令和6年 No.1343



令和4年度 第75回山口県学校美術展 推奨作品

「たのしかった 白へびのやかた」

岩国市立そお小学校 1年（受賞時） 宮本 心葉

■特別支援教育の今

山口県教育庁特別支援教育推進室
田布施町立田布施西小学校
山口県立下関総合支援学校

■キラリ高校生

聖光高等学校 機械科
山口県立光高等学校 普通科
山口県立岩国工業高等学校 機械科
山口県立下松工業高等学校 システム機械科

■地域活性化活動助成事業

田布施町立田布施中学校
山口市立八坂小学校
長門市立仙崎中学校
萩市立むつみ小学校

■特色ある取組

学校・家庭・地域とともに
宇部市立神原小学校

室長 岡崎 浩一
校長 藤田 守弘
校長 河合 良房
3年 高橋 海音
3年 中村乃々子
3年 松本 一徳
3年 渡辺 慎也

校長 山中 順子
校長 武政美佐子
校長 林 意知朗
校長 岡本 香

校長 中谷 靖彦

一般財団法人 山口県教育会

〒753-0072 山口市大手町2-18 TEL 083-922-0383 FAX 083-922-5768

URL <http://www.ykoyoikuk.or.jp> E-mail ykoyoikuk@ruby.ocn.ne.jp

明治36年4月第1号 毎月1日発行 発行人 会長：倉増誠彦／編集長：重枝謙二



あなたの アクションは…

山口県教育会がすすめる
「元気やまぐち」3つのアクション

◎あいさつ 返事で 明るいやまぐち

◎笑顔でつなぐ 安心やまぐち

◎ゴミ 落着きのない美しいやまぐち

特別支援教育の更なる推進のために



山口県教育庁特別支援教育推進室
室長 岡崎 浩一

国の動向

「特別支援教育については、共生社会の形成に向けて、障害者の権利に関する条約に基づくインクルーシブ教育システムの理念を構築することを旨として行われることが重要であり、全ての子どもたちが適切な教育を受けられる環境を整備することが重要である」と、令和3年1月、新しい時代の特別支援学校の在り方に関する有識者会議（文部科学省）の報告において、特別支援教育の重要性が示されています。また報告書には、障害のある子どもと障害のない子どもが共に学ぶ仕組みであるインクルーシブ教育システムの理念を実現し、特別支援教育を進展させていくために、引き続き、障害のある子どもの自立と社会参加を見据え、子ども一人ひとりの教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できるよう、連続性のある多様な学びの場の一層の充実・整備などを着実に進めていくことなどの方策が取りまとめられるとともに、障害の有無に関わらず誰もがその能力を発揮し、共生社会の一員として共に認め合い、支え合い、誇りをもって生きられる社会を構築するという方向性が示されています。

本県の方向性

本県の障害のある幼児児童生徒の教育の充実に向けては、本県特別支援教育の基本的な方向性を示す「山口県特別支援教育ビジョン」（2006年）に基づいて、第1期（2006年）、第2期（2011年）の実行計画を作成し、複数の障害を対象とする総合支援学校の改編や、特別支援教育センターの設置等による地域

の幼・小・中・高等学校等の支援を行う体制の構築を進め、2018年には「山口県特別支援教育推進計画」を作成し、共生社会の実現に向けたインクルーシブ教育システム構築のための国の施策の動向の基本的な考え方を踏まえ、取り組んできました。

そして、昨年10月に策定した本県教育の指針となる「山口県教育振興基本計画」に、これまでの成果や課題を整理するとともに、本県がめざす特別支援教育の姿（方向性）や取組方針を示し、特別支援教育の一層の充実に向けた取組を推進しています。

「山口県教育振興基本計画」では、本県がめざす特別支援教育の姿（方向性）を次のように示しています。

- ・ 特別な教育的支援を必要とする障害のある幼児児童生徒が、きめ細かな指導や切れ目ない支援により、自己のもつ力や可能性を最大限に伸ばし、自立・社会参加ができる。
- ・ 特別な教育的支援を必要とする障害のある幼児児童生徒が、より身近な地域で適切な指導や必要な支援を受けることができる。
- ・ 全ての幼児児童生徒が共に学び、支え合い、将来を見据えて地域社会の一員として心豊かに成長できる。

この姿を実現させるための取組を進め、共生社会の実現に向けたインクルーシブ教育システムを構築・推進することとしています。

さて、インクルーシブ教育については、「国連・子どもの権利委員会」（一般意見9号・2006年）では、「すべての生徒にとって意味のある、効果的かつ良質

障害のある特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒の「自立と社会参加」の実現

「共生社会」の実現に向けたインクルーシブ教育システムの構築・推進

山口県がめざす特別支援教育の姿（方向性）

- ・ 特別な教育的支援を必要とする障害のある幼児児童生徒が、きめ細かな指導や切れ目ない支援により、自己のもつ力や可能性を最大限に伸ばし、自立・社会参加ができる。
- ・ 特別な教育的支援を必要とする障害のある幼児児童生徒が、より身近な地域で適切な指導や必要な支援を受けることができる。
- ・ 全ての幼児児童生徒が共に学び、支え合い、将来を見据えて地域社会の一員として心豊かに成長できる。

山口県の特別支援教育推進の柱

- 1 総合支援学校における教育の充実
- 2 高等学校等における特別支援教育の充実
- 3 小・中学校における特別支援教育の充実
- 4 早期からの切れ目ない支援体制の充実
- 5 特別支援教育を推進する体制の充実

■インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進

- ・ 一人ひとりに応じた指導や支援の充実
- ・ 多様な学びの場の整備・充実
- ・ 切れ目ない指導や支援の充実

取組に必要なこと

最後に、特別支援教育の推進は、すべての子どもが可能性を高め、将来、共生社会を構成する一員となる学びの充実につながります。そして学びの場の基盤をつくるには、子どもが障害の有無にとらわれることなく、自然な形で日常的に関わり合う機会の創出が必要です。その関わり合いの中で、子どもも大人も、気づき、学び、行動することで共に成長する積み重ねと広がり

が、共生社会の形成につながると考えます。本県では、総合支援学校、小・中・高等学校等において、このような学びの場の充実に向けた取組が実践されており、その取組をより一層高めることでインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育を更に推進します。

山口県の特別支援教育

リベンジ



聖光高等学校 機械科

3年 高橋 海音

私は全国優勝を目標に、聖光高校ヨット部に入部しました。

私は420級という二人乗りのヨットに乗っていました。2年生で出場したインターハイでは、周りの選手たちに翻弄され自分たちの走りができず、改めて自分の未熟さを痛感することとなりました。しかし同時に、来年は必ず「リベンジ」するという強い気持ちも芽生えました。

それからは常にレースで勝つために必要なことを意識して仲間たちと練習に取り組んできました。そんな中、私たちの引退とともにヨット部が廃部となることを聞かされました。歴史と伝統あるヨット部が廃部になることはとてもショックでしたが、逆に「やってやろう」と3年生5人の気持ちが一つになりました。そして最後の予選では二艇がインターハイの出場権を勝ち取りました。

3年生全員で迎えたインターハイでは第1レースから順調に滑り出し、全国で勝負できる手応えを感じて波に乗りました。その後のレースも上位でまとめることができ、準優勝することができました。優勝にはあと一步届きませんでしたが、高校生活最後のインターハイは本当に充実したものとなりました。先生方や地域

の方々からも祝福の声をいただいて、聖光高校ヨット部の幕引きにふさわしい結果が残せたことが本当にうれしかったです。

部活動を引退し、改めて素晴らしい環境と最高のチームでヨットができていたと実感しています。チームの仲間と日々励まし合いながら当たり前のように練習ができていたのも、顧問の先生方やいつも応援してくれた地域の方々のおかげでした。

私は大学に進学してもヨットを続けますが、まだ達成できていない全国優勝に向けて、これから出会う仲間とともに「リベンジ」を果たしたいと思っています。



仲間とともに

挑戦



山口県立光高等学校 普通科

3年 中村 乃々子

私の目標は「オリンピックでメダルを取る」ことです。今こうして言えるのは、多くの挑戦と経験をした高校3年間であったからです。

私はヨット部に入部したく、光高校に入學し、この3年間で大きな分岐点に2度立ちました。一度目は、1年生のときです。幼少期からやっていたウインドサーフィンで世界大会に出場しましたが、良い結果を残すことができず、ヨットとウインド

サーフィンの両立は難しいと感じました。そのため、ウインドサーフィンをやめ、ヨット競技一本に絞ることを決めました。二度目は、2年生のときです。一人乗りでインターハイ個人優勝はできたものの団体優勝を逃したため、得点の高い二人乗りに転向することを決めました。これらの決断をする時には、多くの葛藤がありましたが、3年間切磋琢磨し支え合ってきた6人の同期や仲間

の存在がありました。そして、いつでも些細なことでも相談に乗ってくださり、挑戦を後押ししてくださった顧問の先生方、競技者としてあるべき姿を教えてくださいましたコーチの方々、どんな時でも応援してくれた家族、友達のおかげで、自分自身と向き合うことができ、高校生活を駆け抜けることができました。これまでの出会いに本当に感謝しています。そして、高校3年生のインターハイ。大会当日はとても緊張しましたが、ペアとこれまで培ってきた力を全て出し切ることができ、個人優勝、団体優勝が決まった時は嬉しさと安堵感でいっぱいになりました。それと同時に自分の決断に自信を持つこともできました。

3年間で、嬉しいことも悔しいことも多くの経験ができたのは、たくさんの方々への支えがあったからだと思います。これからも、謙虚な姿勢と感謝の気持ちを忘れず、次の目標に向けて、挑戦していきます。



コンバインド優勝

ダブルゴール



山口県立岩国工業高等学校 機械科

3年 松本 一徳

左肩に8個の金星が刺繍された黒いユニフォームの勇者が何度も宙に舞っていました。2016年山口インターハイ。当時、私は小学5年生。それから5年後、同じ感動を味わった15人のメンバーが憧れの岩工に入学してきました。入学式の後、ハンドボールコート横で保護者を含めた全員で撮った記念写真は私の一生の宝物です。だれもが希望に満ちあふれた輝いた顔をしています。

それからの1年間は、「当たり前」のレベルの違いに驚かされる日々でした。「自己思考のレベル」「フィジカルレベル」等々、全てにおいて経験したことのない高い「当たり前」のレベルを要求されました。

1年秋からの新チームでは全ての県内大会で優勝し、全国大会へと駒を進めることができました。けれども、想像以上に全国の壁は高く厚く、日本一どころか上位進出さえ叶わないまま最終学年を迎え、私はキャプテンに任命されました。その頃、監督がミーティングの席で「Double Goal」という言葉を口にされ、「君たちは富士山の頂上ばかり見ていないか？」とおっしゃいました。「ダブルゴール」、つまり「全国優勝だけが終着点ではない」...

その日から私たちは自分達の足下に向け、それぞれが二つ目、三つ目の人生目標を探し始めました。2023年7月、北海道函館。私たち選手14名とマネージャー3名は、それぞれの「ダブルゴール」を胸に秘めて最後のインターハイを迎えました。準決勝で宿敵、長崎瓊浦高校に延長戦の末、惜敗し全国3位という結果になりました。

結局、私たちは7年前、夢に見た「日本一」というゴールにはたどり着くことはできませんでした。しかし、翌日、約10時間かけて岩国に帰る新幹線の中、部員はみんな晴れやかで希望に満ち溢れた顔をしていました。

2年前、入学式当日、全員で撮ったあの写真のように。



函館インターハイにて

ものづくり全国大会



山口県立下松工業高等学校 システム機械科

3年 渡辺 慎也

私は工業高校に入学して「ものづくり部」に入ることを決めました。その理由は、学校紹介のパンフレットに「ものづくり部」が載っており、私も、ものづくりに関連した部活に入ろうと思ったからです。

機械系ものづくり部は「旋盤部門」と「溶接部門」の二つがあります。部の活動は技能検定へのチャレンジやものづくり大会に向けて取り組むことです。私が取り組んでいる旋盤部門は、材料である鉄製の円柱から、決められた課題をいかに正確に早く製作できるかを競う部門です。

入部してすぐの時の県大会には、先輩方の都合が付かず、先生から「試しに出てみないか?」と言われ基本も分からない状態で出場しました。ほぼ一か月の短い練習期間しかない中で結果が11人中同点3位タイで驚きました。驚きと同時に徐々に悔しい気持ち芽生え、結果の分析を行いどうすれば失点を抑えることができるのか、を考えて練習に取り組みました。

2年生では3時間の競技時間内に作ることを目標として臨んだ県大会で優勝、中国大会でもまさかの優勝。全国大会に出場することができました。しかし、全国大会では10人中

9位となって全国大会のレベルの高さを肌で感じて帰ることになりました。3年生での大会は、前年度の全国大会出場者のプレッシャーもあり、県大会2位でなんとか中国大会に出場。中国地区大会では優勝し、2回目の全国大会出場を決める事ができました。

全国大会は、0.01ミリの減点が2点ずつ増えていく厳しい課題です。毎日3時間以上の練習を重ねた結果、準優勝を勝ち取ることができました。3年間、親身になってご指導頂きました諸先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

来年からは就職しますが、ここで培った経験を活かし、今後も頑張っていきたいと思っています。



令和5年度全国大会の競技中

「シアターゆめ」の活動を通して 地域や学校を明るく！



田布施町立田布施中学校
校長 山中 順子

本校では、コミスク・ルームで、「シアターゆめ」という地域のパネルシアターのサークルの皆さんに月に1回来校していただいています。

月に1回の活動の内容は、昼休みの20分間ですが、パネルシアターの絵人形をハサミで切って準備をおこなう活動や、サークルの方が、中学生の前でパネルシアターを上演して下さる活動などがあります。上演する内容は、「モクモクくものレストラン」「3匹の山羊とtrol」「おりひめとひこぼし」等です。

学校での活動も増え、内容も充実してきたので、準備したものを町内の小学校児童クラブに上演に行こうという話が決まりました。夏休みを利用して中学生もサークルのみなさんと一緒に小学



児童クラブでの様子

生の前でいろいろなお話をパネルに絵人形を貼りながら上演しました。児童クラブの小学生の皆さんから大変喜ばれました。

助成をしていただいたおかげで今までは、サークルの方に借りていたパネルが、中学校での上演専用となりました。サークルの方にもさらに気軽に学校に来ていただけます。今後は、地域での活動も続けながら校内でも図書室や学年のホール等で上演するという目標を立てています。生徒たちもサークルのみなさんとの活動に期待を膨らませています。

昼休みのほんの短い時間ですが、サークルの皆さんとおしゃべりをしながら活動をしています。中学生も「シアターゆめ」の活動に参加し、サークルの皆さんとコミュニケーションがうまく取れるようになり、人前で大きな声で発表が出来るようになりました。

これからも学校の中だけでなく地域にどんどん上演に出て、「シアターゆめ」の活動を通して、地域や学校を明るくしていきたいと思います。



中学校での活動の様子

「重源太鼓」で地域を元気に！



山口市立八坂小学校
校長 武政 美佐子

本校は緑豊かな森林や美しい佐波川とその支流が広がる恵まれた自然環境に立地している。現在全児童数18名。令和6年度には開校150周年を迎える歴史のある学校である。地域の歴史や伝統、自然を生かした教育活動も大変充実しており、平成15年に旧引谷小学校から受け継いだ「重源太鼓」の継承活動も本校の特色ある教育活動の一つだ。

「重源太鼓」は、鎌倉時代の僧「重源上人」が奈良の東大寺再建に向けて、徳地の地より木材を切り出したという言い伝えをもとに、「杣取りの木を切る音」や「佐波川を下る木材の様子」をイメージして作られている。

子どもたちは地域の祭り等の諸行事で、演奏活動を通して、地域住民との交流はもとより、地域活性化の一翼を担っている。

これまで高学年を中心に活動に取り組んできたが、児童減少に伴い、今年度は1年生も加え、全校で演奏にチャレンジしている。夏休みには卒業生もゲストティーチャーとして練習に参加し、全校で

練習に取り組んだ。そして見事、11月の地域の祭りでは、1年生を加えた新体制で「重源太鼓」を初披露することができた。時代とともに演奏形態は少しずつ変化していくが、子どもたちの成長とともに「重源太鼓」は確かに受け継がれている。

地域は毎年、太鼓を力強く響かせ元気に演奏する子どもたちの姿を見ることを楽しみにしている。子どもたち自身も継承活動に誇りや自信をもち、「地域を元気にするために自分たちにできることをしたい」と意欲的に地域貢献に取り組んでいる。

子どもたちが生き生きと活動に取り組む姿そのものが地域を元気にする源である。

地域に見守られながら、今後も八坂っ子たちの太鼓は力強く徳地の町に響くことだろう。



「徳地フェスティバル2023」での太鼓演奏

ふるさとへのちょっとした恩返し



長門市立仙崎中学校
校長 林 意知朗

本校は、日本海に面した風光明媚な長門市の港町である仙崎地区にあります。校区の通・仙崎は古くは古式捕鯨の町として盛えました。また、童謡詩人金子みすゞさんの生誕地としても広く知られています。

本校ではボランティアと思いやりの精神の醸成を念頭に地域との連携を深め、生徒の体験的な活動を推進しています。その推進リーダー的なカルチャー部は、本年度、山口県教育会の地域活性化活動助成事業の支援の下、「ボランティアで学校と地域を盛り上げよう」をスローガンに掲げ、さまざまな活動に取り組んできましたので、その一部を紹介します。

- 校区内にある市の観光産業の拠点の一つ、道の駅「センザキッチン」で、年間を通して清掃活動を行っています。中学生が観光客にあいさつで元気を発信し、地域の魅力を堪能していただくことを通して、郷土のよさを再発見しています。
- 毎年の活動として夏季休業から絵馬の制作に着手し、12月に地元の「八坂神社」に奉納して

います。部員やその他の生徒とともに翌年の干支のイラストをダイナミックに大きな板版に描き、神社を訪れた多くの方から感謝の言葉をいただいています。

- 地域をもっと知る手段として、昨年度は「ふるさとカルタ」を製作しました。休業等の機会に市内の観光名所や穴場へ出向き、写真を撮り、関連のある俳句を生徒、保護者、地域等から募集したり、自ら考えたりして、五十音の札を完成させました。

今年度は、校内外のさまざまな機会での有効活用を計画しています。

- 「金子みすゞ記念館」と連携し、みすゞ通りに掲示する200枚の木製の「詩板」を製作しました。生徒が自らの感性を基にして描いた絵とみすゞさんの詩が、一枚の板上で融和し、唯一無二の作品が完成しました。

生徒が「ふるさとへのちょっとした恩返し」を通して、郷土に誇りをもち、これからも周囲への感謝の気持ちを忘れずにいてほしいと願っています。



道の駅センザキッチンでの清掃活動を終えて

地域を元気に！ ～むつみっ子太鼓に挑戦してみよう～



萩市立むつみ小学校
校長 岡本 香

会場に広がる大きな拍手と笑顔。「むつみ福祉・文化のつどい」での演奏が終わった。

「竹太鼓の音が届いてうれしかった」「見ている人と心が一つになった気がした」と、子どもたちからの声。

むつみ地域は標高300㍍～400㍍にあり、高地の特性から冬は寒さも厳しく積雪も多い。肥沃な耕地に恵まれ、トマトや大根など多くの農産物を出荷している。学校教育に協力的で「子どもは地域の宝」という思いが強い。

「人口は少ないが行事は多いよ」と自慢げに話される地域の方。お祭りや運動会、ひまわりフェスタに駅伝等々、その熱い思いを身近に感じている。学校も子どもたちも、「地域の一員としてできることは何か」を問いながら参加させていただいている。

今回の出演依頼にも、元気と笑顔を届けるというねらいのもと、竹太鼓に挑戦してみることにした。まずは、道具の準備である。保育園の倉庫にあつ

た古い竹や台。地域の方が切ってくださいました。そして、山口県教育会の地域活性化活動助成事業によりご支援をいただき平太鼓を購入したことで、演奏に厚みを増すことができた。

練習では、「奥阿武むつみ太鼓」の方々に基本のたたき方を教えていただいた。「子どもたちと関わるのがうれしい」「元気になる」と、あたたかいご指導をいただいた。

本校では、ふるさと学習を柱とし、地域の自然や歴史、生活や文化に係るさまざまな学習活動において、地域の方とのつながりを生かした協働的な学びを大切にしている。

今回のむつみっ子太鼓への挑戦が、地域のためになっていることに気付かせ、価値付けることで、主体的に考え行動できる力が身につくと信じている。今後も、地域と子どもたちの思いをつなぐ役割を果たしていきたい。



練習風景



むつみっ子太鼓

みんなでつくる

「笑顔あふれる

すてきな神原」

をめざして…



宇部市立神原小学校

校長 中谷 靖彦



100周年記念
キャラクター
【メタセコイアちゃん】

はじめに

本校は、今年度開校100周年を迎えました。表題のテーマ「笑顔あふれる すてきな神原」は、100周年を記念して6年生が考えたものです。このテーマ実現に向けた、学校・家庭・地域による連携活動を、三つのプロジェクト部会の取組を通して紹介します。神原中学校区では、「まなび（知）・こころ（徳）・そだち（体）カリキュラム」の三つを、小中一貫「学校・地域連携カリキュラム」として設定し、三部会の取組で学校課題の解決をめざしています。

一 「まなびプロジェクト部会」の活動

「まなびプロジェクト」では、児童が「自ら学ぶ力を身に付けること」をめざし、「生活科・総合的な学習の時間」を核とした家庭・地域との連携活動を学校課題として取り組みました。6年総合的な学習「もっとすてきな神原にしよう」では、神原地区のこれまで



まなび① 6年全児童参加の熟議



まなび② 6年学習発表

とこれからについて、地域住民や市役所の方々の調査活動を行いました。その後、6年生児童と保護者・地域住民、全教

二 「こころプロジェクト部会」の活動

職員で、「神原のよさ・課題・改善点」について意見を交わす熟議を行いました。神原地区には公共施設がたくさんあり恵まれています。子どもや大人のそれぞれが考える課題も出されました。そして、みんなでの神原地区についての夢や希望を語り合いました。このような活動を通して、子どもは、すてきな神原にしていくなための七つの視点を明確にし、自分たちができることを保護者・地域に向けて堂々と提案することができました。

「こころプロジェクト」では、児童が「相手の立場に立ち、思いやりのある行動ができること」をめざした家庭・地域との連携活動を学校課題として取り組みました。小中合同クリーンアップ活動では、小中学生でチームをつくり、校区内にある公園のゴミや草、落ち葉等を回収する地域貢献活動を実施しました。地域の美化に向けて、児童生徒、保護者、地域住民が一体となり

みんなで清々しい汗を流しました。



そとろ② 校則見直し代表委員会



にころ① 小中合同 クリーンアップ活動

た。また、児童主体の校則見直し委員会を設置しました。全学級による校則見直しの学級会活動、代表委員会を経て、校則見直し委員会児童も参加する学校運営協議会での熟議も行いました。このような活動を通して、子どもたち自身が見直した校則を主体的に守っていく経験を積み上げていきたいと思います。

三 「そだちプロジェクト部会」の活動

「そだちプロジェクト部会」では、児童が「自律した運動・生活習慣を身に付けること」をめざした家庭・地域との連携活動を学校課題として取り組みました。新体力テストでは、神原地区の文化体育委員や保護者に種目担当者となってもらいました。各学級を小グループに分けて、丁寧に指導・計測することで、児童の運動意欲が大きく高まりました。また、水泳学習では、

中学校の保健体育科教員や保護者に指導・見守りに入ってもらいました。そうすることで、専門性を生かした個別指導の幅が充実し、泳力アップにつながりました。このような活動により、本校の学校課題の一つである体力向上を改善する取組の方向性を見出すことができました。

終わりに

「笑顔あふれる すてきな神原」をテーマにした学校・家庭・地域が連携した三つのプロジェクト部会の取組は、まだスタートしたばかりです。家庭・地域とともに学校課題の共有を図り、保護者・地域住民・教職員によるプロジェクト部会を連動させながら、「子どもの笑顔を真ん中にしたみんなの笑顔」を具現化する学校運営を行っていききたいと思います。



そだち② 中学校教員による水泳学習



そだち① 地域と連携した新体力テスト